



## 「酪青研全国大会(11月)延期のお知らせ」 ~新型コロナウイルスの感染拡大を受け2020年の開催断念~

2020年7月14日~15日にかけて日本連盟は常任委員会を開催しました(※今回は新型コロナウイルス感染拡大を防止する観点から東京ではなく東北にて開催)。常任委員会では、本年度の酪青研全国大会についても協議が行われ、11月18日に開催される予定であった第72回日本酪農研究会(今年は札幌大会)については新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、開催を見送ることとなりました。十勝協議会からも経営発表予定者が選出されただけに残念でなりません。なお、来年度につきましては第72回大会として札幌で開催することとし、発表予定者についてもそのまま引継がれる予定となっております。新たな日程等が正式に決定しましたら改めて皆様にご報告致しますので、よろしくお願い致します。

## プロジェクトX ~酪農民と雪印のあゆみ~

今年2020年は雪印乳業食中毒事件(2000年)から20年の節目の年を迎える。そこで事件から20年を迎える今、【プロジェクトX】では酪農民と雪印の歩みを振り返る。第2回は酪農研究会開催と資金調達について(引用文献:雪印乳業史、酪農風雲録)。



### 「昭和23年12月10日、第1回北海道酪農研究会を開催」

酪青研が産声を上げた5か月後に第1回北海道酪農研究会(現在の全国大会の前身)が北酪社大会議室で開催される運びとなった。道内各地から多感な若者174名が出席し、米八合、小麦粉一升五合、澱粉一合、砂糖二〇匁、毛布一枚、丹前を持ち寄り各々がリュックに背負い「自分の牧場をもっと良くしていく」との熱い想いを胸に参加した。宿泊場所は研究会の会場である大会議室のフローリングにシートを敷き、日赤から借りた赤毛布を寝具に三泊四日、一人の不平もなく熱心に研修を受けたのであった。

### 「苦悩した資金調達、連盟事業に立ち上がる壁」

その後、酪農研究会は発展を遂げ第2回大会からは研究発表を開催することになった。開催にあたっては太田委員長(初代)の英断で黒澤賞を制定した。その際、持ち回りの賞杯は大相撲の天皇杯を参考に作成する運びとなった。こうして酪青研事業を運営していくにあたり、当時の酪農係が最も頭を悩ませたのは資金調達であった。当時の情報伝達手段のメインとなるのは印刷物。その印刷費用の捻出すら厳しい状況だったのだ。当時発行していた発行物は4つ。①機関紙「酪農青年」②酪農経営研究(第1回研究会の講義と座談会)③「デンマークの最近の酪農事情」④「酪青研の在り方・4Hクラブとの関連と独創性について」等の印刷物である。

それらの発行物については、会員五千人を対象に有償配布として発行したもののその本代が入ってこない。もともと運営は酪青研会員からの会費と企業からの賛助金で賄い、会費は1人10円と第一回の総会で決定していたが、会費に対する関心は会員・関係者にもまだ浸透が薄く、会費の納入はほとんど無いといった有り様だった。「このままでは事業運営すら危うい。まずは資金調達を急がなければ…」と当時酪農係として事務局長を委嘱されていた酪農課長は振り返っている。印刷会社にも何度も頭を下げ、印刷経費を実費にまで値引きしてもらった。酪青研は「自主的な団体」とは言え、財源となる会員からの会費、売掛金の回収はほぼゼロだったのだが、太田委員長の号令とその熱い思いは当時の雪印乳業・クロバー乳業(両社とも雪印メグミルクの前身)にも伝わり、企業賛助金を捻出することが決定したのであった(続く)。



酪農研究会で黒澤賞を手渡す黒澤西蔵先生



昭和8年頃の十勝清水出張所(後の清水工場)

## クローズアップ 酪青研

※この特集は若手会員の素顔とインタビュー内容を紹介し会の魅力を再発見する企画です!

### 大樹町酪農青年研究会 会長 前田 竜志 さん(大樹町在住)

大樹単研会長である前田竜志さんは現在31歳。十勝協議会傘下の組織の中では最年少のリーダーだ。大樹町に牧場を構え、現在3代目。飼養頭数190頭(搾乳97頭)、年間出荷乳量1,100t、草地70ha、コーン30ha、経営目標は「高成分・高泌乳牛で個体乳量13,000kg」。牛舎は開放式FS牛舎で給餌場は屋根のみで開放的な牛舎。年間体細胞は年間平均8万/mlと高品質生乳を生産する。大樹町で前田さんの存在感は大きく、地元青年部部長、乳牛改良同志会の役員を務めてきた。今回は酪青研最年少リーダーの素顔に迫る。

#### QUESTION 01. 就農までの経緯 「酪農家として働く父の背中をみて育った」

「親父の背中を見て育ってきたのは大きい。幼い頃の夢は警察官だったが、いつの間にか地元の帯広農業高校に進学し、帯広畜産大学へ。就農して親父の苦労を改めて痛感した」と語る。その後、音更町にて酪農ヘルパーの経験を積み20歳で結婚、23歳で前田牧場の後継者として就農され現在に至る。

#### QUESTION 02. 酪青研入会のきっかけとその魅力 「異世代間の繋がりが強み」

きっかけは父(昌文さん)が酪青研に入会していたことだと振り返る(\*父:昌文さんは2002-2004年まで日本連盟常任委員を歴任)。「気が付けば顔を出すようになっていた。まずは様々な会合に顔を出して酪農についての知識を深められれば」と振り返る。「酪青研に入って感じたことは普段付合いの無い世代との交流が出来ることだと思う。同じ町で酪農業を営んでいても会話をしたことが無い人もいる。特に20代から50代まで幅広い世代が会員として活動している組織は酪青研の強みそのものだ」と語る。

#### QUESTION 03. 酪青研の存在とは 「幅広い酪農家との絆を深められる存在」

「酪青研は全国の酪農家・地域の酪農家とより絆を深められる組織」と語る。前田会長自身、全国大会や酪総研シンポ、ジュニア育成交流会など様々な行事に積極的に参加しており、日頃から他地域・異世代間での絆を大切にされている一人だ。特に息子さんの友達作りにも活かさればとの思いから毎年ジュニア育成交流会などにも参加しており、将来の仲間づくりにも活かしてもらえれば…と思いを滲ませた。

#### QUESTION 04. チャレンジしたいこと 「新たな企画運営に挑戦していきたい」

「経験豊富な経営者を講師にまずは単研会員を中心としたバーンミーティングの開催や若手をメインとした会員交流会など新たな企画運営にチャレンジしていきたい」と力を込めて語る。「若い酪農家が面白い!と思える魅力的な組織にすることが自分の使命だと感じている。会員の意見を幅広く聞き、より充実した運営を実践したい」と熱心に話す姿は胸に突き刺さる。情熱に燃える若きリーダーから目が離せない。



酪農語録「デンマークをもって北海道の範となす」 言葉:元貴族院議員 宮尾舜治